特集 パーキンソン病について

本院パーキンソン病・ジストニア治療研究センターの森垣副センター長に、パーキンソン病とその外科的治療などについてお伺いしました。

パーキンソン病とは

パーキンソン病は、ジストニアと並び運動異常症を生じさせる２大神経疾患とされ、神経難病に指定されている病気です。多くの研究者のたゆまぬ努力で、少しずつその原因が解明されてきましたが、未だ詳細については不明な点が多い病気です。分かっていることは、脳の運動制御を助ける神経伝達物質のひとつであるドパミンを作る神経細胞が減少し、ドパミンが少なくなることです。これによって、身体が動きにくくなります。この病気は、ふるえや動きづらいといったことから始まり、徐々に転倒しやすくなるというふうに進行していきます。また、運動症状以外にも、図１のとおり様々な症状を生じさせるため、患者さん本人はもちろんですが、そのご家族へのサポートも重要となる病気です。

【運動症状】
振戦、無動、運動緩慢、筋強剛、姿勢保持障害

【非動症状】
便秘、嗅覚異常、睡眠障害、うつ、起立性低血圧、排尿障害、認知症、幻覚、妄想、発声・嚥下障害など

（図１）パーキンソン病の諸症状

■説明は
徳島大学病院パーキンソン病・ジストニア治療研究センター副センター長
森垣 龍馬
（もりがき りょうま）

■治療に関する問い合わせ
脳神経外科外来
Tel：088−633−7147
■教室リカバ
Tel：080−3698−8739

患者さんへひとこと

本院では、脳神経内科や脳神経外科、リハビリテーション部などが共同してパーキンソン病の治療に励んでいます。さらに患者さんのサポートとなるよう教室リカバでのフレイル予防にも取り組んでいます。一緒によりよい治療を目指して頑張っていきましょう。

徳島大学病院での外科的治療

パーキンソン病への治療は薬物によるものが基本で、リハビリテーションなどが平行して行われることがあります。しかし、症状が進行し、手術による治療を希望される場合、本院では脳深部刺激療法（以下DBSという。）を実施しており、年間30件程度行っています。DBSでは、図２のように脳に電極を挿入し、電気で刺激することによって、異常になった運動回路を正常なものへ修正します。ただし、多くの利点とともに、機械を体内に挿入するため感染症のリスクや、バッテリー交換が必要などの欠点があるため、DBSの導入には利点・欠点をそれぞれ理解して判断していただくことが重要です。

（図２）脳深部刺激療法（DBS）

パーキンソン病とフレイル

フレイルとは、「健康と要介護の間」の状態で、加齢により体力や気力が弱まった状態を指します。パーキンソン病は、特に社会的フレイル（孤独）や身体的フレイル（筋肉量の低下など）に陥りやすく、社会的フレイルの状態ではパーキンソン病の症状が悪化することが分かってきました。徳島大学蔵本キャンパス内には「リカバ」という体操教室（無料）があり、患者さん同士の交流や運動・認知トレーニングなどを実施しており、オンラインでも参加ができるようになっています。本院の患者さんにも多く参加いただき、好評を得ています。

今後は、多くのパーキンソン病患者さんを救えるように、また負担を減らせるような社会的な仕組みを作ることを目指しています。いろいろな課題はありますが、様々な方々からの協力を得ていくことで、これを実現させていければと考えています。